

八代市内の寺院である安養寺，本成寺，春光寺 の建築的特徴

森山 学* 原田 聡明** 石本 和真***

Architectural Characteristics of temples in Yatsushiro-shi ;Annyo-ji, Honjyo-ji and Syunko-ji

Manabu Moriyama*, Toshiaki Harada**, Kazuma Ishimoto***

This paper reports three temples connected deeply with the lord of the Yatsushiro Castle. There are Annyo-ji temple, Honjyo-ji temple and Syunko-ji temple.

Annyo-ji temple is the most luxurious among three temples, because it was built in the early 17th century. In addition, the module is the biggest too. There are splendor and formality in Honjyo-ji temple's inside in contrast. The form of plan of Syunko-ji temple resembles chief priest architecture of the Zen Buddhism.

Honjyo-ji temple and Syunko-ji temple were built according to a law. The law was established in 1668 to control the size of temples. Therefore these roofs are shikoro form and these depth is 6ken. Actually, Syunko-ji temple was rebuilt in the Meiji era. However, the reason to have the characteristic of the law is because it was restored in the figure of the Edo era.

キーワード：八代市，近世寺院

Keywords：Yatsushiro-shi, Temple of the Edo era

1. はじめに

平成23年8月29日から平成24年2月29日まで、熊本県八代市内の建造物578件の悉皆調査を行った。現況を把握することを目的とする調査である。この結果は「まちあるき八代たてもものマップ」として八代市により刊行された⁽¹⁾。

調査対象は、寺社建築、潮受堤防、石橋、近代建築物、くまもとアートポリス等の現代建築物等であり、そのほとんどは現地で現状を視認し写真撮影を行う一次調査にとどまった⁽²⁾が、数件については二次調査として平面の実測調査を実施した。

二次調査の対象は奈良木神社、奈良木観音堂、光壽山安養寺本堂、泉福山本成寺本堂、江東山春光寺本堂・書院である。

今回はそのうち、歴代の八代城主らと関わりの深い菩提所等である後者3件の寺院建築について、その平面図、組物や彫刻等の現況ならびに特徴を報告するものである。これら3件は、後述のとおり、各々宗派が異なる。

各々の現地調査日は表1のとおりである。

表1 現地調査日

	1次調査		2次調査	
	安養寺	平成23年9月5日	11月19日	11月27日
本成寺	平成23年9月7日	11月27日	平成24年2月25日	
春光寺 ⁽³⁾	平成23年9月9日	平成24年2月26日		

また八代市内の寺院建築に関する先行研究としては、原田聡明氏の川原地蔵堂、塩屋地蔵堂に関する研究、尾道建二氏、北野隆氏による法輪寺に関する研究、下田雅子氏、北野隆氏による八代城下町の小社・堂に関する研究が報告されているのみである⁽⁴⁾。昭和60年度に実施された熊本県近世社寺建築緊急調査⁽⁵⁾では、今回報告する上記3件の寺院は、候補に挙がっているものの、調査は実施されていない。

2. 光壽山安養寺本堂 (図1)

2-1. 来歴⁽⁶⁾

本来、駿河国安部郡府中にて、光明寺(熊本市)の祐念の次男・岸部祐賢により創建されたものであるが、「肥後国誌」では1600(慶長5)年、「八代郡誌」では1601(慶長6)年に、八代城主・加藤正方の母・妙慶禅尼の招きにより、八代・麦島城下の宮之町に、祐賢開基により、夫・可重菩提所として創建されたとする。「八代市史」では、麦島安養寺の創建年代については、加藤正方の八代入城の年

* 建築社会デザイン工学科
〒866-8501 熊本県八代市平山新町2627
Dept. of Mechanical and Intelligent Systems Engineering,
2627 Hirayama, Yatsushiro-shi, Kumamoto, Japan 866-8501
** 熊本大学教育学部・崇城大学工学部 非常務講師
*** 熊本高等専門学校専攻科 生産システム工学専攻2年



図1 安養寺本堂（平成23年9月5日撮影）

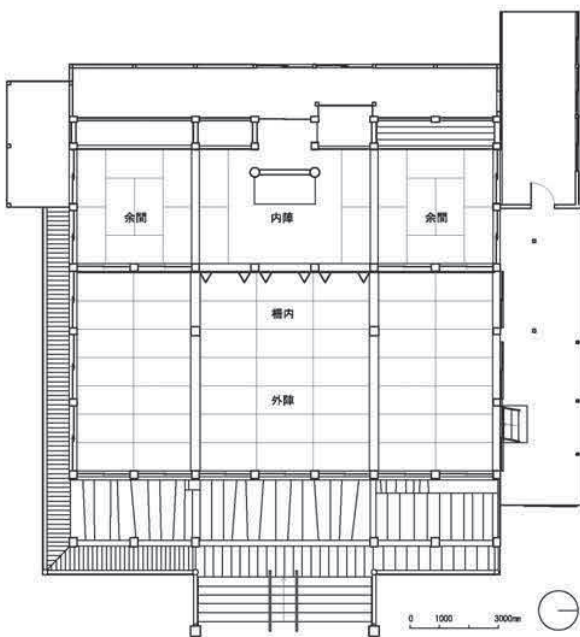


図2 安養寺本堂平面図（平成23年11月19日、27日実測）

が1612（慶長17）年であることから、これ以降であろうと推測されている。もっともな指摘である。

当時は浄土真宗大谷派であった。

1619（元和5）年、地震により麦島城が倒壊後、八代・松江城下（旧中島町）に移転している。1624（寛永元年）年に母没後、正方が檀越となり、父母の菩提所として同地に再建⁷⁾しているが、この年代は不明である。「八代市史」では「八代事迹略考」及び「寛政二年一二月の寺の報告書」に基づき中島町安養寺の位置や寺地・本堂の広さを説明している。これによると松江城下第一の町である本町筋の縦丁の西、広横町に開き、正教寺町通りに裏門を設ける一区画を有し、松江城の大手口に位置する。境内は東西30間、南北35間であった。本堂は桁行7間、梁間8間で、広横町の方角・東を正面としていた。

加藤家改易（1632（寛永9））後、細川三斎の城主時代（～1645（正保2））に、大手口という城下随一の立地から、

現在地の旧細工町（八代市本町三丁目4-41）へ移転される⁸⁾。年代は不詳である。周囲には長福寺（のち東光寺）、正教寺、円応寺、善行寺、教覚寺があり、松江城の裏鬼門にあたる地である。

1684（貞享元）年には、浄土真宗大谷派から本願寺派に転派する。

現在、建造物、内陣厨子（宮殿）が市指定有形文化財である。

2-2. 本堂の向きと間取り（図2）

現境内は北側に前面道路があり、二重門の形式の鐘楼門が開く。この門については棟札より建設年は1791（寛政3）年、棟梁は阿部源八であることが分かっている。

これに対し本堂は、前面道路のある北向きではなく、境内西に位置し、隣地のある東向きである。

そもそも中島町安養寺は、境内東側の広横町を前面道路とし、本堂も東を正面としていた。現本堂を中島町安養寺の移築とする「八代市史」では、この配置も継承されたとしている⁹⁾。この中島町安養寺は本町筋の西に位置しているが、東には正方を檀越とし、父・可重の菩提所である日蓮宗の浄信寺が位置する。両寺院は加藤正方時代の城下町にとって、重要な役割を担ったわけだが、そのうち中島町安養寺が西に位置し、東向きであったのは、当寺院が浄土真宗であり阿弥陀如来を本尊とする故で、西方浄土を意図したと考えられる。現在の安養寺もこの考えを踏襲したと推測できる。

本堂の間取りは入母屋造平入り向拝つきで、桁行は7間、梁間は内陣奥の廊下を含めると8間で、間数が中島町安養寺と一致する。正面に広縁、正面・南面に落ち縁がある。内部は外陣、柵内、余間、内陣の構成である。棟札は発見されていない。

現在、棧瓦葺であるが、これは1988（昭和63）年に改修されたためである。しころ屋根ではないことから、寛文八年令（1668（寛文8））¹⁰⁾以降に改築されていないことが分かる。

広縁は切目縁で、縁板は台形で上辺と下辺を交互に配置しており、材の節約のためと考えられる。広縁の向かって右側には太鼓を収納する太鼓棚を吊っている。

身舎は、切目長押、内法貫、内法長押、飛貫、頭貫、台輪で固める。正面左手は内法長押がないが、痕跡から、かつて存在していたことが分かる。



図3 中柱の結界の痕跡（平成23年11月19日撮影）



図4 向拝の繫虹梁上部（平成23年9月5日撮影）

外陣は梁間3間である。外陣中央間と脇間の間に無目敷居があり、中柱が立つ。他の柱径が260mm前後であるのに対し、中柱は316mmと大きい。また中柱の痕跡からかつて結界があったことが分かる(図3)。つまり外陣の奥は柵内である。外陣脇間は竿縁天井、外陣中央間は格天井、柵内は折上格天井とし、天井の形式も相応している。

内陣・余間は梁間3間で、各々高さ383mm、高さ289mmの上段となる。内陣境は、余間には襖、内法長押、菊花の彫刻欄間、台輪、臺股、蛇腹支輪、板支輪とし、内陣には折戸、内法長押、鷲の彫刻欄間、台輪、臺股、蛇腹支輪、彫刻板支輪とする。内陣は後門形式である。天井は、余間が竿縁天井、内陣は折上格天井である。

平面は浄土真宗の典型と言える。

2-3. 本堂の意匠

向拝は三間幅で向拝柱は本堂内で最も大きい柱径341mmであった。向拝虹梁には雲竜の浮彫があり、同主題が再度、柵内の中柱間の虹梁に現れる。中柱間の虹梁の竜はひげを手前に飛び出している。向拝の組物に連三斗、中備に二つの出三斗を配し、大斗・巻斗は皿斗つきである。

広縁筋の柱との繫虹梁の上には、中央に大瓶束を立て、その上に段違いの二本の海老虹梁、手挟を受ける(図4)。向拝柱と広縁筋の柱、広縁筋の柱と側柱との繫虹梁には葡萄の浮彫をはじめ、各種の彫刻が施されている。

広縁の柱筋、身舎正面の側柱筋には台輪がつき、出組となる。広縁の柱筋は、身舎の柱位置にあわせ、中備にも出組を使用する。皿斗が使用されるのは広縁の柱筋までで、身舎には使用されていない。広縁天井は出組に挟まれた板張り天井である。外観は正面がこのように豪華に裝飾されているが、側面等には組物はなく、また正面が二軒であるのに対し、それ以外に飛檐垂木はつかない。

身舎正面の建具はガラス戸の引き違い戸であるが、かつて観音開きの外開き戸であったことが痕跡から分かる。

内部は外陣脇間が出組、外陣中央間と柵内は二手先である。彫刻を施した大振りの木鼻の挿肘木としたり、中備には大仏様の二手先が見られる。内陣境の内陣両端の柱上部のみ三手先である(図5)。内陣境と柵内境には尾垂木がつく。天井仕上げ同様、組物も各空間に相応しく差異を設けている。

余間には組物はなく、内法長押がつく。内陣は仏壇境に



図5 内陣境と柵内境の上部
(平成23年11月19日撮影)



図6 来迎柱の上部
(平成23年11月19日撮影)

出組、来迎柱・来迎壁に台輪がつき、来迎柱の隅備えは頭貫木鼻に、尾垂木がつく二手先である。来迎柱・来迎壁・仏壇壁は金箔で、来迎柱の上部は極彩色、来迎壁には蓮の絵が描かれている(図6)。

特に向拝・広縁、外陣・柵内の組物などの量塊感が印象的であり、八代市内でも他には例を見ない、もっとも重厚で見事なものと言える。

2-4. 本堂の柱間寸法

柱間寸法の算出にあたり1尺を303mmで計算する。

桁行の柱間寸法は、外陣脇間が各々、芯々2065~2076mmで約6.8尺であった。外陣脇間を通して見ると内法で約6.4尺、芯々で約6.8尺のモジュールである。

外陣中央間は中央が芯々2027mm(約6.7尺)で広く、左右が芯々2007~2009mmで約6.6尺だった。外陣中央間を通して見ると内法で約6.4尺、芯々で約6.7尺のモジュールである。

梁間の柱間寸法は外陣が芯々2467mm(約8.1尺)、2396mm(約7.9尺)、2155mm(約7.1尺)と奥へ行くほど小さくなる。外陣を通して見ると、間数3で割れば、内法で約7.4尺、芯々で約7.7尺という1間の平均値が出る。これを畳枚数から3.5で割ると内法で約6.4尺、芯々で約6.6尺である。

内陣は仏壇部分が芯々967mm(約3.2尺)、他は芯々2048~2059mmで約6.8尺だった。仏壇以外の内陣を通して見ると内法で約6.4尺、芯々で約6.8尺のモジュールである。

このことから6.4尺をモジュールとする畳割り制⁽¹¹⁾の建築と言える。ただし実際の1間の寸法は、正面中央を大きくしたり、外陣奥行き方向に逡減していく等の手法を用いていることが分かった。

3. 泉福山本成寺本堂(図7)

3-1. 来歴⁽¹²⁾

熊本城主・加藤清正の嫡男・忠正が1607(慶長12)年に没後、妙音院日領を開山として、1608(慶長13)年、八代・宮地村、現在の宗覚寺の地に菩提所として創建される。

1632(寛永9)年、細川三斎の八代城入城後、1634(寛永11)年に八代・松江城下に当寺を移転させる(八代市本町一丁目10-24)。日蓮宗である。

この時、宮地本成寺の本堂は、三斎の父・幽斎の菩提所・泰勝院に献上、移築された(現在の浄澤寺本堂)ため、本堂を新築する。三斎はその報賽として、八代城本丸表枋形門の第一門であった高麗門を本成寺に寄進する。

1716(享保元)年に類焼したため、隣接する笹堀を埋め立て、本堂、門ともに再建する。これら本堂、門ともに市指定有形文化財である。

3-2. 本堂の向きと間取り(図8)

本堂は西南西向き、入母屋平入り向拝つきでしころ屋根である。この屋根形状は、類焼後の再建の際に、寛文八年



図7 本成寺本堂 (平成23年9月7日撮影)

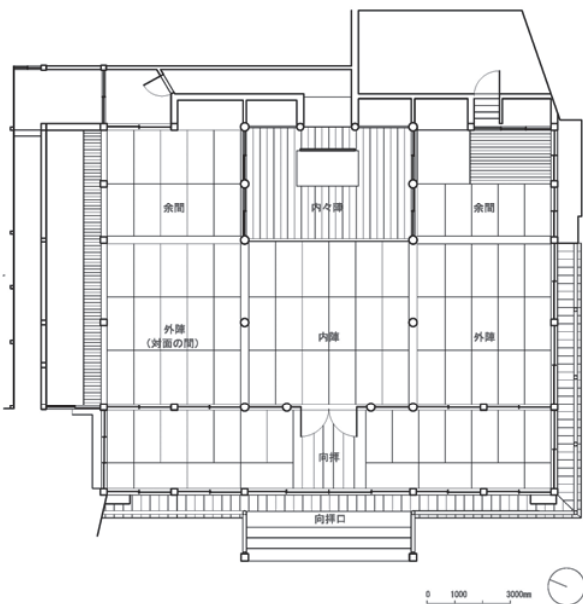


図8 本成寺本堂平面図
(平成23年11月27日, 平成24年2月25日実測)

令(1668(寛文8))に基づき建設された結果である。棧瓦葺であるが、右余間の押入にかかる下屋のみが目板瓦である。

桁行は5間、梁間は仏壇を含めて6間である。内部は六室構成に入側縁がつく。

向拝は「向拝口」と呼称⁽¹³⁾され、正面から南側へ広縁が回る。

現在は中央を除き畳敷きに変更されている入側縁は、桁行5間梁間1間で、「向拝」と呼称される。

外陣は、中央間を「内陣」、脇間を「外陣」と呼称する。梁間は2間で、桁行は各々3間、2間である。「内陣」とその奥の「内々陣」は漆塗りの丸柱で囲まれ、内法長押上に箴欄間が入る。敷居・鴨居がつくが、結界を置き、御簾を吊っており、「内陣」は「内々陣」との連関性が強い。

「内陣」は1981(昭和56)年に修復されているが、一間一花の格天井と豪華であるのに対し、「外陣」は竿縁天井

で組物もなく簡素である。天井高も各々、4534mm, 3980mmとその差は大きい。

余間及び「内々陣」と呼称される内陣は、梁間2間である。余間は上段がなく畳敷きで、天井も竿縁天井で、外陣との連関性が強い。「内々陣」との境は総引き手の襖と御簾で仕切られる。右余間は鬼子母神、左余間は位牌壇を置くが、この位牌壇は本来床の間で、左余間に城主を迎えることから⁽¹⁴⁾、左脇の「外陣」は「対面の間」とも呼称される。

「内々陣」は高さ135mmの上段で板敷きであり、天井は折上天井に雲龍を描く。天井高は4340mmである。

「対面の間」・左余間の脇に「位牌棚」が並ぶ。これは1969(昭和44)年に改造されている。

空間の呼称は異なるものの、外陣中央間に人天蓋を吊り、仏具を設える点で日蓮宗の典型と言える。

3-3. 本堂の意匠

妻飾りは大瓶束笈形とし、道路から望見できる南側は彩色されている。

「向拝口」は独立性の高い空間である。その理由として①隅木を配し三方に勾配をとる、②「向拝口」の木部のみ彩色する、③四本の虹梁が囲い込み内側に瓜、楓、瓢箪、唐草、菊が彫られ彩色されている、④内側四方に蛇腹支輪が巡り出組、出三斗が迫り出す、⑤板張りの平天井である、が挙げられる(図9)。

ちなみに向拝虹梁、繫虹梁の各々の表側には波に兎、茄子と楓が彫られる。表側の支輪は彫刻板支輪で「向拝口」内部と対をなす。木鼻は象鼻、籠彫である。

身舎周囲は雲形の絵様の象鼻の上に巻斗、実肘木で丸柱を受ける。これら部材は白く彩色されている。

「向拝」は組物はなく内法長押がつき、各柱筋に繫虹梁がかかり、その上に墓股が乗る他、「内々陣」正面中央の虹梁に麻の葉文様の四方入隅を彫り、強調している。

「外陣」、「余間」は前述の天井仕上げ、畳、天井高、床高に加え、組物なく内法長押がつく点でも共通し、「外陣」と余間の関連性が高い。

「内陣」(図10)は四方を内法長押、頭貫、台輪、出組、彫刻板支輪で囲む。支輪は彩色され、組物はしのみ白に彩色する。漆塗りの丸柱は上部に粽がある。



図9 「向拝口」
(平成23年9月7日撮影)



図10 「内陣」
(平成23年11月27日撮影)



図11 「内々陣」境の持送り
(平成23年11月27日撮影)

図12 「内々陣」
(平成23年11月27日撮影)

「内々陣」境は、葡萄に栗鼠の絵様の虹梁を犀の持送りが受ける(図11)。「内々陣」(図12)は内法長押、頭貫、台輪、出組、蛇腹支輪の構成で、頭貫、台輪は朱漆塗り、支輪は漆・朱漆塗り、出組は朱漆でしのぎを金箔とする。小壁には雲中菩薩や鳳凰が描かれる。来迎柱から迫り出す金箔の籠彫が、片持ちで虹梁を受け、その上に金箔の木鼻、台輪、尾垂木つきの二手先の組物、中備に金箔の臺股を乗せる。支輪は下段が金箔の彫刻板支輪で、上段に蛇腹支輪とする。左右の仏壇は群青色の壁面に花頭窓が開けられ、内部壁面を金箔とする。「内陣」、「内々陣」は前述の天井仕上げも含め、その華麗さは市内でも随一であり、格式ある書院造の「外陣」一余間と著しい対照をなす。

また加藤家紋の蛇の目、桔梗、宗紋の日蓮宗橋が門の棧唐戸、臺股、本堂の大棟、妻飾りの臺股、他各建物の瓦といった各所に使用されている。

3-4. 本堂の柱間寸法

柱径は、角柱が226~240mmで向拝柱のみ262mmである。丸柱は来迎柱のみ250mmと若干小さく、他は292~300mmである。

桁行の柱間寸法は芯々で、中央が6049mm(約20尺)、両側が2521.5~2539mmで約8.3尺である。中央の20尺は「内陣」境では、芯々で、中央が3028mm(約10尺)、両側が1514~1519mm(約5尺)である。

「内陣」に相当する中央は、畳枚数から3で割ると内法で約6.4尺、芯々で約6.7尺である。

「外陣」を通して見ると、間数2で割れば、内法で約8尺、芯々で約8.4尺という1間の平均値が出る。これを畳枚数から2.5で割ると内法で約6.4尺、芯々で約6.7尺である。

梁間の柱間寸法は「向拝口」、「外陣」が芯々で2964~3028mmで約10尺に相当する。「外陣」を通して見ると、間数2で割れば、内法で約9.5尺、芯々で約9.9尺という1間の平均値が出る。これを畳枚数から3で割ると内法で約6.3尺、芯々で約6.6尺である。

余間は芯々で2044.5~2050.5mm(約6.75尺)である。余間を通して見ると、内法で約6.4尺、芯々で約6.75尺である。

このことから、6.4尺をモジュールとする畳割り制の建築とみることができる一方、本来板敷きであった「向拝」も含めて前半部分を5尺、10尺、20尺、後半部分の梁間を6.75尺を一間とする柱割り制の建築と解釈することもできる。

次に梁間3間、庇1.5間ずつとする寛文八年令との関係を推測してみる。当法令は実際のところ、全体で梁間6間と解釈され適応されていたことを含めて配慮し⁽¹⁵⁾、入側縁の「向拝」を省いた場合、梁間は仏壇まで含めて芯々約11159.5mmで、これは約6.1尺を一間とする6間とみなすことができる。つまり本成寺が合法的建築であるためには、当時、「向拝」がまさに向拝の機能を有する広縁であったと、解釈すべきであろう。

4. 江東山春光寺本堂・書院(図13)

4-1. 来歴⁽¹⁶⁾

細川家の家老・松井康之が父・正之の菩提所として、1583(天正11)年、玄圃を開山として、丹後久美浜に宗雲寺を創建する。宗雲寺はその後、豊後、小倉と移り、その間、康之没(1612(慶長17))後に春光院と改める。1632(寛永9)年、細川家の肥後入国に伴い、松井家も熊本に移る。

1638(寛永15)年、細川忠利の命で、康之の菩提所・春光院を建立し、翌年落成する。のち松雲院と称する。

細川三斎没(1645(正保2))後、松井興長が八代・松江城に入城する(1646(正保3))。この際、北の丸にあった細川幽齋菩提所・泰勝院を、松井家菩提所・宗雲寺に改称する。

この宗雲寺を1675(延宝3)年に焼失した泰巖寺に改めた際、新たに菩提所として、熊本の松雲院を、現在地である八代・古麓(八代市古麓町971)に移し、春光寺に改めた(1677(延宝5))。臨濟宗である。

境内の高台には松井家歴代の墓所である古廟と新廟が建つ。

現在の書院・庫裏は松雲院からの移築とされている。当地は西南戦争の戦場となり(1877(明治10))、本堂の方は1887(明治20)年に再建されたものである⁽¹⁷⁾。門・番所は八代・松江城三の丸の永御蔵の薬医門と番所の遺構を1987(昭和62)年に移築したものである。いずれも市指定有形文化財である。

4-2. 本堂の向きと間取り(図14)

境内は、中世の古麓城の陣内だった場所である。境内へ至る桜馬場と呼ばれる参道は、当時の大手口にあたる。本堂は北西向きであるが、それは桜の馬場方向である。本玄関の位置は、境内の石桁橋、門、石段、ならびに桜の馬場の軸線上に位置している(図15)。本堂の向きと配置はこの点から決定されたと言える。

屋根は寄棟造平入りのしころ屋根で、棧瓦葺きである。この屋根形状から、明治の再建ではあるが、寛文八年令の影響下に建設された近世当時を復元するような工事ではなかったかと推測できる。

平面は前後三室の六室構成に入側縁がつき、正面と向って左面に広縁が回る。方丈型本堂と見られるが、さらに正面中央に向拝はなく、正面向って右側に唐破風の本玄関が



図13 春光寺本堂（平成23年9月9日撮影）



図15 参道軸線上の本玄関 図16 入側縁からみる堂内
（平成23年9月9日撮影） （平成24年3月18日撮影）

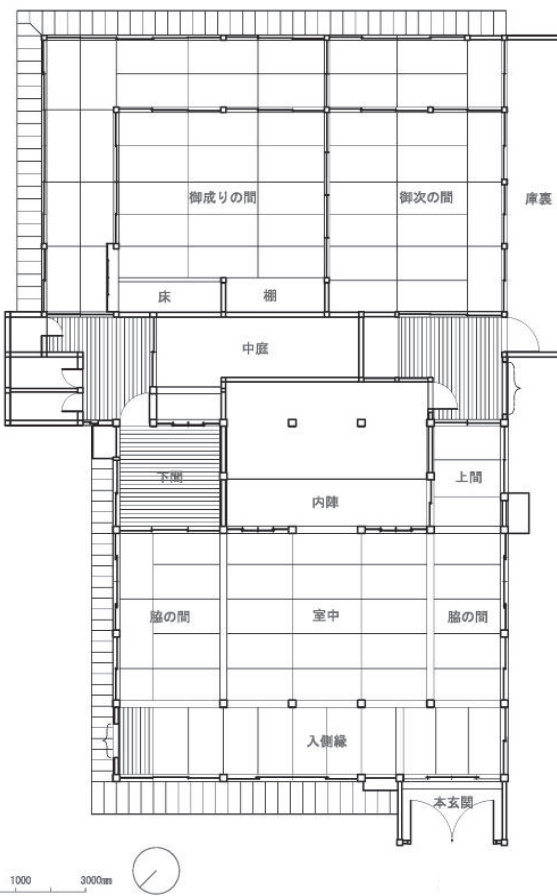


図14 春光寺本堂・書院平面図（平成24年2月26日実測）

つく。方丈建築の玄関の配置である。本玄関には式台があり格天井である。

各室は二本または三本引きの敷居で分かれる。そのうち入側縁（図16）は、畳敷き、板張り天井である。玄関からの踏み込みとなる三畳の部分は、玄関幅で無目敷居が入る。入側縁の玄関から見た突き当たり壁面に花頭窓が開く。

右脇の間・上間は畳敷き、竿縁天井で、左脇の間・下間より幅が狭く、玄関から一直線上に書院の御次の間に至る。本堂から書院に渡るところで花頭窓が開く。御次の間から

左手に御成りの間へ至る。城主参詣時に使用する御成りの間の存在が当寺院の性格を示す。右手は庫裏へと通じるが、庫裏は、今回は実測調査を行っていない。

左脇の間・下間も竿縁天井であるが、下間は板敷きである。突き当たりに仏壇がある。下間からも書院に通じているが、これは新設された便所が仲介している。

室中も竿縁天井である。内陣境は中央柱間の内法長押を他より一段高くしている。左右の柱間には4枚立ての襖が入る。

内陣は板敷きで上段にはなっていない。天井は竿縁天井で、本尊上部のみ折上格天井で仏天蓋とする。本尊の前柱間の垂れ壁は花頭形である。

4-3. 本堂の意匠

組物は全くなく、装飾的なものは少ない。本玄関の唐破風には、兎の毛通しと藁股がある。藁股には松井家の三つ笹紋がつく。鬼瓦・巴瓦にも同様に三つ笹紋がある。書院、門扉には三つ笹紋に交じり細川家の九曜紋も見られるが、本堂にはそれはない。

軒には飛檐垂木はない。

内部は各室に内法長押が回り、「北」、「南」、「東」、「西」と書かれた釘隠しがつく。室中と脇の間の境には背の高い箴欄間が入る。

書院にも触れておくと、御成りの間には各々1.5間幅の床と床脇がつく。床脇は三枚の棚板による函木棚に天袋という構成である。これに付書院がつく座敷飾りで格式ある



図17 御成りの間の座敷飾り（平成24年3月18日撮影）

構成である(図17)。天井は御次の間とともに竿縁天井である。縁側は畳敷き、板天井である。内法長押しには鶴または菊の釘隠しがつく。また具象的な波と葦の彫刻欄間がある。

禅宗に相応しい方丈風の本堂と、城主菩提寺に相応しい書院とからなる建築である。

4-4. 本堂の柱間寸法

柱径は195~210mmと、今回対象とした3寺院の中で最も小さい。

桁行の柱間寸法は、室中が芯々で1979.5~1981.5mm(約6.5尺)である。室中を通して見ると、内法で約6.3尺、芯々で約6.5尺である。

左脇の間は芯々で3127.5mm(約10.3尺)、右脇の間は2121mm(7尺)である。右脇の間を内法でみると約6.3尺である。

梁間の柱間寸法は、入側縁が芯々で2124.5mm(約7尺)、内法で約6.3尺である。

脇の間は、前方から芯々で2017.5mm(約6.7尺)、2976mm(約9.8尺)であるが、脇の間を通して見て、畳枚数から2.5で割ると、内法で約6.3尺、芯々で約6.6尺である。

上間は、前方から芯々で950.5mm(約3.1尺)、2124mm(約7尺)である。上間を通して見て、畳枚数から1.5で割ると、内法で約6.3尺、芯々で約6.8尺である。

このことから6.3尺をモジュールとする畳割り制の建築とみることができる。

次に寛文八年令との関係を推測してみる。梁間に入側縁から内陣のつやまで含めて芯々で約11374mmで、これは約6.3尺を1間とする6間とみなすことができ、寛文八年令に従って建設された建築と言える。つまり1677(延宝5)年の春光寺は、1668(寛文8)年以降の建築であり、書院・庫裏とは異なり、熊本・松雲院からの移築ではなかったと推測できる。さらに明治再建の春光寺は、少なくとも規模については、近世当時を復元するかたちでの再建であったと解釈できる。

5. まとめ

歴代の八代城主らと関わり深い八代市内の菩提寺等について、平面図、組物や装飾等の建築的特徴の現況を把握した。本文内に述べた各々独自の特徴が現代にまで継承されていることは、これら寺院が加藤正方、細川三斎、松井家といった城主の移り変わりにも関わらず、引き続き庇護されてきたことの証拠である。

安養寺は中島町安養寺の移築だと想定した場合、いつの時代まで遡れるかはいまだ不明ではあるが、17世紀前半の大名による菩提寺建設ブームの時期で、諸宗寺院法度(1665(寛文5))や寛文八年令(1668(寛文8))以降の寺院への規制が始まる以前に相当し、城主が檀越となる菩提寺として、モジュールや柱径は他寺院より大きく、組物等も他寺院にはない豪華さであった。反面、正面や前方を重

視し、柱間寸法の通減や部材の省略等も見られた。またその宗派は、城下町内の位置や本堂の向き、間取りに反映されており、今は省略されている柵内の存在も痕跡や天井仕上げから把握できた。

本成寺は再建年代が明らかであり、寛文八年令(1668(寛文8))に従って建設されている。その特徴はしころ屋根や側柱上部に組物がない点に見て取れる。組物を設けない代わりに木鼻、巻斗、肘木で丸桁を受けているが、これは認められたということであろうか。さらにこの法令との関係から「向拝」が本来、広縁であったと解釈した。また加藤忠正の菩提寺で、細川三斎の寵愛を受けた寺院であり、「向拝口」、「内陣」、「内々陣」の華麗な装飾や「対面の間」の存在にその反映が見て取れる。また「内陣」-「内々陣」と「外陣」-余間の見事な対照も大きな特徴である。

春光寺は配置、向き、方丈風の本玄関の表現など周囲の環境に配慮しており、その本玄関を含め禅宗寺院に相応しい方丈風の本堂である。本堂内部の格式ある構成は、書院の座敷飾りとともに、城主の菩提所として相応しいものである。またしころ屋根、梁間寸法、組物の全くない点に、本成寺同様、寛文八年令の制限を受けていることが明らかである。その点から熊本・松雲院からの移築ではないこと、明治時代の再建でも近世当時を復元する再現であったことを推測した。

(平成25年9月25日受付)

(平成25年12月3日受理)

注

- (1)「まちあるき八代たてもものマップ」プロジェクトチーム：まちあるき八代たてもものマップ、八代市、(2012)。
- (2) 一次調査に関する報告は、拙稿：「八代市内建造物の悉皆調査の報告とその建築的特性に関する考察」、熊本高専紀要、第4号、pp.65-72、(2012)を参照。
- (3) 平成9年9月5日に八代市教育委員会文化課が調査し平面図を作成しているが、当時は寸法を測量していなかった。今回の調査では当時の調査図面も活用した。
- (4) 各々の論文は以下である。
原田聰明：「近世寺院建築(地蔵堂)に関する研究 熊本県八代市川原地蔵堂、塩屋地蔵堂について」、日本建築学会中国支部研究報告集、第11巻1号、pp.193-196、(1983)。
尾道建二・北野隆：「熊本県八代市の法輪寺本堂について(2)」、日本建築学会中国・九州支部研究報告、第10号、pp.561-564、(1996)。
下田雅子・北野隆：「八代城下町の町人地にみられる社・堂について」、日本建築学会九州支部報告、第36号、pp.365-368、(1997)。
- (5) 熊本県の近世社寺建築—熊本県近世社寺建築緊急調査報告書一、熊本県教育委員会、(1987)。
- (6) 北島雪山：肥後国誌、下巻、p.279、青潮社、(1972)、石川愛郷：八代郡誌、pp.537-541、臨川書店、(1927)、八代市史編纂協議会：八代市史、第四巻、pp.314-335、

- 八代市教育委員会, (1974), 木下潔: 江戸時代の八代一八代城下町の変遷と寺社考一, pp.105-117, 私家版, (2009).
- (7) 「八代市史」ではこの「再建」を以下の二つの意味で使用している. ①檀越が代わり, 再度創建される, ② 正方による創建に際し, それ以前の数年が仮屋にすぎないと想定し, あらためて建設される. (八代市史編纂協議会: 前掲書, p.316, pp.320-322.)
- (8) 「八代市史」が引用する「八代事迹略考」では「移建」と表現されている.
- (9) 八代市史編纂協議会: 前掲書, p.328.
- (10) 光井渉: 近世寺社境内とその建築, 中央公論美術出版社, pp.124, (2001). に, 高柳真三・石井良助校訂: 「御触書寛保集成」, 岩波書店, (1934). から引用した条文が以下のように掲載されている.
「一梁行京間三間を限へし,
但, 桁行は心次第たるへし,
一佛壇ついや京間三間四方を限へし,
一四方しころ庇京間壹間半を限へし,
一小棟作たるへし,
一ひち木作より上の結構無用たるへし,
右, 堂舎客殿方丈庫裏其他何ニても, 此定より梁間ひろく作へからず, 若ひろく可作之子細於有之は, 寺社奉行所え申伺之, 可任差図候以上」
- (11) 今回報告する3寺院は畳敷きであることから, 畳割りと柱割りの可能性について検討した. 今後, 枝割りにについても検討の必要がある.
- (12) 北島雪山: 前掲書, pp.274-275,
石川愛郷: 前掲書, pp.516-517,
八代市史編纂協議会: 前掲書, pp.477-484, pp.533-534,
木下潔: 前掲書, pp.89-92.
- (13) 呼称については平成23年11月27日の現地調査において, 住職へのヒアリングで確認.
- (14) 平成23年11月27日の現地調査において, 住職へのヒアリングで確認.
- (15) 寛文八年令の実際の適応例については, 光井渉: 前掲書. に詳しい. 実質, 全体で6間を守る限り, 内部の間取りの変更は黙認する, といった当時の状況については, pp.134-140を参照.
- (16) 北島雪山: 前掲書, pp.312-313,
石川愛郷: 前掲書, pp.561-578,
木下潔: 前掲書, pp.53-54.
- (17) 八代市教育委員会が昭和60年に現地に設置した解説板に, 庫裏・書院の移築, ならびに本堂が明治時代の再建であることが記されている. 再建年代の1887 (明治20) 年については八代市文化まちづくり課より情報提供いただいた.